



JEG ニュースレター 134号

www.jegschweiz.com

2013年4月30日発行

小さな証

自分の世界から苦しみ
の世界へと、大震災の
爪痕の中に身を挺して
飛び込み、自ら重荷を
背負い必死に生きる菊
地神学生の大震災2年
後の証です。



エペソ人への手紙

4月14日からマイ
ヤー牧師による待望
の”エペソ人への手
紙”シリーズの講解
メッセージが始まりま
した。



CS/Teensレポート

スイスJEGの新しい
うねり、TEENSとCS
の働きとビジョンに
ついてゲルスタ・ウ
エンディ師にレポート
していただきました。



帰国者リトリート

この春、陶芸の里として
有名な滋賀県信楽で開か
れた帰国者リトリート
を、かつて欧州生活をさ
された福森真樹姉にレポ
ートしていただきました。



小さな祈り

「鉄は鉄によってとがれ、
人はその友によってとがれる」
兄弟姉妹との交わりを大切にできるよう、
キリストの体である教会を
皆で支え合っているよう、
あなたの知恵と力を注いで下さい。
あなたの愛を人々に届けるために
あなたの御心を行う者として下さい。

聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。使徒の働き 1:8

教会が誕生した日

ペンテコステー聖霊降臨節

キリスト昇天後、聖霊が使徒たちに降臨したことを記念する日で、今年5月19日の日曜日です。復活祭から数えて50日目の祭りですが、実際には復活祭後の第7日曜日に祝われています。

イエス様は復活後、使徒たちに現れ、「エルサレムから離れず、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。聖霊のバプテスマを受けるからです。」と言われました。その言葉通りに、聖霊は主を信じるすべての者に下ったのです。

私達も主にあって置かれているその場所で、それぞれ“主の証人”として歩ませていただきましょう。聖霊の豊かな祝福と導きをお祈り致します。

ちいさな証

苦しんでいる世界へ
菊地 祥彦

オアシスチャペル 利府キリスト教会

「もしかすると、この時のためであるかもしれない。
(エステル4:14)」



人生の中でこのように思う時が何度かあるのかもしれませんが。私にとって、東日本大震災がそうでした。千年に一度の大震災が自分の生きている時代に起こりました。震災の混乱から落ち着いてくる中で、自分が被災地に置かれている意味を考えられるようになりました。神様はご自身の計画の中で、震災前から東北の地に私を置き、そして今もこの東北で私を生かして下さると信じています。

私はスイスとの国境に近いFreiburg（フライブルク）に留学していた頃、2009年の6月に信仰を持ちました（JEGのみなさんにはとてもお世話になりました！本当にありがとうございました！）。そして、2010年の2月に日本に帰国し、献身の思いが与えられて2011年の4月から神学校に入る予定でした。入学の直前に震災は起きました。私の神学生としての歩みは、震災とともに始まったとも言えます。

あれから二年が経ちました。この二年間、継続して教会で設立された被災地支援団体の活動にも携わっています。「被災者の方々に仕える」ことはまったく未経験



であり、自分にとって大きなチャレンジでした。それは「“自分の世界”から“苦しんでいる世界”へ行く」と表現できると思います。自分のことを考え、自分のニーズを満たして生きる「自分の世界」を越えて、苦しんでいる人々のことを思い、苦しんでいる人々のニーズを満たすために「苦しんでいる世界」に行くのです。

そのような行動は、自分の人生を振り返ったときに信じられません。なぜなら、クリスチャンになるまではずっと自分のことだけを考え、自分勝手に生きてきたからです。

自分の夢、自分の成功を追い求めて生きる人生を生きていました。クリスチャンになったからと言って、そのような問題がすべてなくなったというわけではもちろんありません。

クリスチャンになってからも、人を愛する大切さを知りながら、苦しんでいる人々のために祈り、仕えるというのは簡単なことではありませんでした。マザー・テレサは「愛の反対は憎しみではなく無関心です」と語りました。苦しんでいる人々を覚え続け、その人々のために生きるということは罪人の私たちには難しいことであり、時にチャレンジなことです。私自身、大変な被害を受けた地域の側に置かれていながら、被災者の方々を覚え続け、祈り続けることは簡単なことではなく、忙しさに振り回されるような日々を過ごしているときは自分のことでいっぱいになってしまいます。



ある日、瓦礫だらけの変わり果てた被災地へ赴いた時に、イエス様のことを思いました。イエス様も、荒れ果てて罪に染まっているこの地上の世界に天からやって来てくれたんだよなあと思っただけです。イエス様は、すべてが満たされている天の世界から、苦しんでいる私たちのために問題だらけの世界にあえて降りてきてくださいました。

イエス様に付き従う者にとって、「苦しんでいる世界」へ行き続けるということは、大切なことなのだ体験をもって学ばされています。キリストのように生きることはもちろん難しいことですが、これからもイエス様のように変えられていくことを祈り求めながら、震災後の時代に生かされている者として被災地で貢献していきたいと願っています。みなさん、ぜひこれからも日本のために、特に被災地で苦しんでいる人々に関心をもち、お祈りください！

菊地祥彦神学生は、サッカーの監督になるために独フライブルグ留学の2年間、スイス教会の礼拝と家庭集會に忠実に通われる中で救われました。帰国し、神学の勉強を始めて間もなく、東日本大震災が故郷を襲い、身を挺して支援にたちあがりました。ヨーロッパで救われたのは、「この時のため」であったと証されています。スイスJEGでは菊地神学生を祈りと献金をもって支援しています。



1、4月28日には、初めて盛永進牧師（前ロンドンJCF牧師）をお迎えし、礼拝を守りました。盛永牧師は”どんな善い事をすればよいか”をテーマにマタイ19章16-26から解き明かされました。日本の教会を覆う閉塞感を憂い、このスイスから日本に向けて閉塞感脱却の大きなリバイバルが起こって欲しいと願われての渾身の説教は、私たちに勇気と深い感動を与えました。また、JEGユースバンド”渡り鳥”による賛美は、春らしい明るさと躍動感をこの日の礼拝にもたらししてくれました。

なお、盛永牧師は、前日、クスター節子姉宅で持たれたサンクトガーレン集会においてもご奉仕され、ルカによる福音書15章のイエス様の例え話から、伝道の実践について話され、遠方から参加された兄弟7名の参加者とともに祝福された時を持ちました。また、29日（月）には、チューリッヒ近郊のトムセン家で持たれた”昼食／茶話会”でも、聖書からお話いただき、貴重なお交わりの時をもちました、多くの御奉仕に心から感謝致します。



家庭集会／クスター姉宅で

2、4月14日（日）には、南ドイツからマイヤー・マルティン牧師をお迎えして礼拝を守りました。マイヤー牧師は「神の教会とその救い（救われることとはなにか）」をテーマに、エペソ人への手紙1章1-14から解き明かして下さいました。



昨年のJEGはゲルスタ牧師がご病気のため、外部から沢山の牧師をお招きして説教のご奉仕をしていただき、それは恵みでもあり、多くのことを学ぶことが出来ました。統一性に欠けるきらいがありました。そこで、役員会ではマイヤー牧師に年を通じて月に一回の系統だった説教をお願いいたしました。14日の「エペソ人への手紙シリーズ」はその期待の第一回となりました。マイヤー牧師のドイツ語通訳の付いたメッセージは、スイスJEGのメッセージ専用サイト <http://jeg.meielisalp.ch>、また盛永進牧師の説教はスイスJEGのHPからダウンロードしてお聴き頂けます。



4月14日／28日の礼拝／愛餐会スナップ

3、3月10日の東日本大震災記念礼拝における特別献金は、4月25日に、宮城県の被災地にオアシスライフ・ケアを訪れた本園万子姉によって直接届けられました。

昨日（日本時間4月25日）、本園さんを通して、スイス日本語福音キリスト教会からの支援金をいただきました。心から感謝いたします。菊地神学生への継続的なサポート、お祈りもありがとうございます。スイスと日本、遠く離れておりますが、教会同士の豊かな「絆」を神様がつかないでくださったことを感謝しております。

スイスの教会に神様の豊かな祝福がありますように！

オアシスチャペル利府キリスト教会
オアシスライフ・ケアスタッフ：郡山英明

4、今年で第2回を迎えるSLIMカンファレンスは4月4日から7日まで、昨年と同じ北イタリア・ベルガモ郊外のSan Pellegrino Termeで、大嶋重徳師と毛利陽子師をメッセンジャーとしてお迎えし、62名の参加者と共に開催されました。来年度のSLIM実行委員長である増谷啓伝道師のレポート（5p）をお読みください。また、会期中に撮った写真や、メッセージ・ワークショップの動画などは下記Facebookページに掲載されていますのでこちらも併せてぜひご覧ください。
www.facebook.com/slimconference



SLIM13に参加して

去年の参加者から、素晴らしい集いだったと聞いて、今年是非参加したいと思い、祈り求めています。今回のSLIMで今の私に必要な御言葉を通して、神様はいつも神につながっている事の大切さ、主にあつて教会の一致を求める事の重要性、そして私達が日曜日に礼拝を（しかも日本語で！）持てる事の大きな感謝を、改めてしっかりと学ぶ事が出来ました。また何よりも当日迄知らされていなかった同室者が最高でした！主に全てを求め、従う姿勢を見せていただきました。部屋での交わりは、共に語り（お互い大声で！）、笑い、祈り、泣き、励まし合うと言う、主にある家族としての恵みと祝福を体験出来ました！感謝しています。全ての栄光が主にありますように！

ヘス明美（スイス日本語福音キリスト教会会員）

5、スイス・ブルーリボンの祈り会の紹介記事が掲載された”百万人の福音”4月号がいのちのこことば社から当教会に贈られてきました。お読みになりたい方は受付にお尋ねください。また、日本国総理にあてた北朝鮮に拉致された同胞を救う嘆願書は、スイスJEGから70筆送りました。皆様のご協力を感謝致します。



6、オーニッカー宣教師、クンツ・プリシラ宣教師、ラシェンコ・ペラ宣教師からのRundbrief、工藤篤子ニュースレター50号、吉村美穂ニュースレター73号、井野葉由美メルマガ97号、バルセロナ日本語で聖書を読む会月報、デュッセルドルフ日本語教会月報、ケルボン教会月報、ルーマニア川井牧師の週報、在欧日本人宣教会機関誌、イザール通信、夜越山祈りの家月報届いています。お読みになりたい方は、松林までご一報下さい。



日出ずる国より

スイス教会と私

東京都は小金井市の
芳賀秋先生から

スイス日本語福音キリスト教会の姉妹へ
復活の主を崇め、賛美致します。



私がスイスに芳賀
と何うようになったのは、OMFの宣
教の働きのために、1989年首
都ベルンにいき、
そこからあちこ
ちらの家庭集会で

芳賀がご奉仕をしたのが始まりです。

その後田辺先生たちに同行してスイスの
日本人の集まり、礼拝、原兄姉宅、ベル
ンの吉田姉宅他あちこちらに行き交わ
りを持たせていただきました。どこに
いっても主にある方々との交わりは暖か
く良い思い出となっています。つくづく
「主は一つ、信仰は一つ」とのみ言葉を
思い出しま
す。

スイス教会
のニュース
レター3月
号に寄稿さ
れていた気



芳賀正牧師ご夫妻、スイス
アッペンツェルにて。

愛隣社の阿部兄姉との交わりは、今ウィ
クリフの宣教師としていっているご長女
が大学生の時、小金井教会に出席し始め
た時からです。それから阿部兄姉の祈り
と信仰により気仙沼に教会ができ、そこ
の集まりで度々ご奉仕をさせていただ
き、今に至っています。彼らは素晴らしい
主の証し人です。

スイス教会の姉妹がその素晴らしい賜
物を用い、ニュースレターを通して世界
に主の恵みを発信なさっていること、本
当に嬉しく思います。いよいよ主の証し
人として用いられますようにお祈りして
います。

OasisLife CARE

今日、明日、永遠の必要を！

宮城県はオアシスライフ・ケアの
松田牧人牧師から

スイス日本語福音キリスト教会の皆様へ



オアシスライフ・ケア
の働きをおぼえ、いつも
尊いご支援をいただき、
誠にありがとうございます。
です。

震災から二年以上の時
を経ましたが、東北はい
まだにたくさんの切実な
必要を抱えております。しかし、被災地への関
心はだんだんと薄らいでゆき、東北は大きな寂
しさを抱えています。そのような中、
遠くスイスの皆様からのご支援は、大きな励ま
しとなって届きます。この度の支援金は、東北
復興のために大切に用いさせていただきます。

オアシスライフ・ケアは小さな働きですが、
皆様に支えられ、これまで活動を続けてくる
ことができました。これからも皆様と志を一つ
にし、被災し傷ついている東北の「今日」「明
日」「永遠」の必要を満たすため、働きを前進
させてまいりたいと思います。今後とも、応援
をよろしくお願いいたします。

心から感謝しつつ、スイスの皆様の上に神様
からの豊かな祝福がありますようお祈り申し上
げます。

オアシスライフ・ケアのホームページ [http://
oasislifecare.org/](http://oasislifecare.org/)

ヨーロッパの
日本語教会と集会から



キリストにあつて一つ
ケルン・ボン日本語キリスト教会は
齊藤篤牧師から



2012年4月より、ケル
ン・ボン日本語キリスト
教会牧師として赴任いた
しました、齋藤篤(さい
とう・あつし)と申しま
す。ヨーロッパの各所
にある日本語教会の皆様
と交流できることを喜びつ

つ、はや一年の月日が経ちました。

簡単に自己紹介致します。私の信仰歴はかな
り「稀有」なものかもしれませんが、中学生の時
に友人に誘われるまま「エホバの証人」とな
り、数年の信者生活を送りました。しかし、そ
の生活に疲れ、疑問を感じた末、大学生の時に
エホバの証人との関係を断ちました。

その後悶々として暮
らす中であつて、
当時の下宿近所に
あつた福音派の教
会を訪ねました。
これは神が与えて
くださったプレゼ
ントでした。そこ
で再び神の恵みを



実感した私は、教会の牧師が勧めてくださった
教会で洗礼を受け神学校に入学。学びを経て静
岡の教会で6年間の牧師生活を経験し、ケル
ンへまいりました。

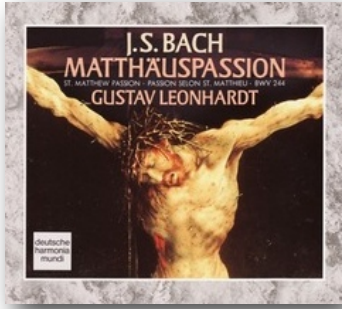
キリストにあつて一つとさせられる恵み。誰
もが心の柱とするこの言葉は、私にとつても信
仰の土台です。ヨーロッパにある日本語教会の
一つに仕える身として、超教派の醸し出す良
さが神の栄光を指し示すものでありたいと願
いながら、伝道牧会する日々にいそしみたい
と思ひます。どうぞ今後ともよろしくお願
いいたします！

ケルン・ボン日本語キリスト教会のホーム
ページがリニューアルしました！[http://
koelnbonn.jp/about/](http://koelnbonn.jp/about/)

「マタイ受難曲」をテーマに

フランス・ストラスブール
聖書のお話を聴く会は
今村泰典兄から

「聖書のお話を聴く会」は、当時ストラス
ブール大学に留学されていた藤原江玲さんとい
う学生が、2008年5月1日に、内村伸之牧
師をストラスブールにお呼びしたのが始まり
で、2013年3月22日(金)に16回目の会が催さ
れました。



私が教鞭を執るコンセルヴァトワールの音楽学生が多いストラスブルでは、

今までは主にヘンデルのメサイヤから数曲をテーマとして取り上げられていましたが、今回は「**バッハのマタイ受難曲と十字架上の言葉**」というテーマで音楽と絵画を提示しつつ、聖書の御言葉が紐解かれました。

作曲家であるバッハにしても、画家であるミケランジェロにしても優れた芸術作品を世に残したいという思いが先にあったのではなく、伝えたいもの、聖書が語る神、イエスキリストを世の人に伝えたい思いがまず先にあり、その伝える手段として音楽や絵画が用いられたのである。

参加者は全員未信者でしたが、一生懸命先生のお話を聞いて下さいました。参加された方のレスポンスがありましたので、ここに引用させていただきたいと思えます。

昨日内村先生がお話をしてくださった「マタイ受難曲」は、2009年と2011年に一度ずつコーラス隊の一員として歌う機会があったのですが、当時は「何だかとても歴史のある曲を、この曲が生まれた土地の人々に混ざって歌うことができて幸せだなあ…」ぐらいにしか思っていなかった、というのが正直なところです。(もちろん毎回心は震えて、とても感動しました。)

ソリストの方々の歌声やオーケストラの演奏を間近で聴くことができたので、コーラス隊の一員として参加しつつ、曲の半分以上は観客の一人としてホクホクしながら聞き手に回ってもしました^^;

内村先生が「バッハも自分自身を福音史家の一人であるという自覚(責任感?)を持ってこの曲を組み立てた」と仰ったのが心に残り、その後自宅までの道中、当時は指揮者、演奏家、ソリスト、そしてコーラスの一人ひとりまでもが福音史家の役割を担っているという自覚を持ってこの曲を演奏していたのかな?などと想像していました。(コーラス隊の指揮者の方は、バッハの意図を、作曲当時の編制や演奏環境に照らし合わせて、どちらかという音楽家の観点か

らよく語って下さいました。) ストラスブルの聖金曜日の恒例となっている聖ギヨーム教会付き合唱隊による受難曲のコンサート、「ヨハネ受難曲」と「マタイ受難曲」が毎年交互に演奏されるのですが、今年は「マタイ受難曲」の年です。

わたしは、今年は観客として聴きに行きます。昨日の内村先生のお話を聞いた後なので、これまでとはまったく違った聞き方、捉え方、感じ方になりそうです。内村先生がお話くださったバッハの問いかけ「誰がキリストを…」は、日々の生活の中でも繰り返されている問いかけのようにも思いました。答えは、バッハ自身も、当時の人々も現代の人々も、本当はどこかで分かっているのかもしれないな、とも思いました。

神様に示されるまま、またこの会を続けていく事ができればと思っています。皆様、どうぞストラスブルの「聖書のお話を聴く会」が祝福されるようにお祈り頂けたら幸いです。



聖書のお話を聴く会

新たな5つの試み

シュトゥットガルト日本語教会は

SLIM13実行委員

増谷啓伝道師から



4月4~7日、イタリア・ミラノ近郊のサンペレグリーノで第二回SLIM (Servant Leaders In Ministry) カンファレンスが開催されました。日米を含む13カ国から平均年齢37歳の求道者・信徒・牧師が62名集まりました。

テーマ聖句「エペソ4:16」を基に、キリスト者学生会(KGK)事務局長代行の大嶋重徳師、ビーイングサポート・マナ代表の毛利陽子師をメッセンジャーとしてお迎えしました。



詳細はホームページに譲りますが、今回は新たに5つの試みをしてみました。

1つ目は毎回違うメンバーでスモールグループをすることで、様々な人と語り合う良い機会となったという声が多くありました。

2つ目は男女別集会を持つということで、ひと味違うテーマで本音を語り合うことができました。

3つ目は在欧信徒リーダーにワークショップを担ってもらうということで、神学の通信講座について話して頂きました。



4つ目は休憩時間を利用して先生方に個別相談できる時間を設けたということで、牧師先生と相談できない所に住んでいる方などにも非常に喜んで頂けました。

5つ目は会期中に実行委員を一新できたということで、3名の新しい奉仕者が与えられました。

来年のSLIM14も同じ場所で開催されます。皆さんの声を集約しつつ、主の御心に従って新しいことに挑戦していきたいと願っていますので、今後共お祈りとお指導をよろしくお願い致します。

SLIMのホームページ
(www.slimconference.org)



ゲルスタ・ウエンディ



CSとティーンズの働きについて

昨年1月から、JEGのCSの働きが想像もできなかったほどに成長を遂げました。4～12歳までの子供たちの人数が増え（参加者平均5名）、トムセンご夫妻とオーニング・マティアスさんが加わり、新しいスタッフチームが

結成されました。3月16日にミーティングを行い、今年の計画を立て始めました。時折ドイツ語のDVDを使ってイエス様についてのお話を聞くこともあります。紙芝居やフネルグラフを使う場合は日本語でお話しをしています。日本語が分からないお子さんが参加される場合には、臨機応変に対応していますが、基本的には、レッスン自体は日本語で行っています。

2012年2月からティーンズグループも出来ました。「渡り鳥」というユースバンドも結成され、心から主に感謝しています！それに加え、若者たちが自分のお友達を教会に連れてくるようになり、まるで夢のようです。ティーンズはCS同様、礼拝メッ



セージと同時進行で、別室にて行われています。13～18歳までの女の子たち4人が参加しています。ティーンズにとっては一番理解しやすいという理由から、ドイツ語で聖書を学び始めました。マタイの福音書から読み始め、イエス様の生涯を1年間かけて辿っていき、「聖書を読む会」の「5本指」の方法を用いて学んできました。学びの最後には、一番心に響いた聖書箇所や暗誦したい聖句を選び出し、なぜ、その部分が気に入ったかを話し合います。そうすることにより、個性を出し合い、神様について学ぶと同時に、もっとお互いを知ることができるようになります。

ティーンズのグループをスタートした時、CSでの経験をお持ちのジャン・ハウリさんに協力をお願いしま

した。しかし、自分の年齢を理由に不適合であると言って断られました。説得してみたら、見学に来てくださり、その結果1年間喜びを持って奉仕に励んで下さいました。その後、原しのぶさんが加わり、チームとしてうまく機能するようになったのです。

2013年からは、若者たちの希望により日本語で学ぶことになったので、立ち上げから今まで続けてこられたジャン・ハウリさんが、残されたスタッフに奉仕のバトンタッチをされました。今こうして振り返ってみると、彼女の支えがあったからこそ、ティーンズのグループを軌道に乗せることが出来たと心から感謝しています。「ジャンさん、今まで本当にありがとうございました。」彼女の後任として、今村葉子さんが新しくスタッフに加わり、「基礎の学び」というテキストを使いながら、信仰の土台を築こうと試みています。



4月半ばから、私はティーンズを離れ、3人の若者（チャーリー、アンドレアス、ケビン）と共に、「基礎の学び」を始めました。女の子たちと学べなくなったことは少し寂しいですが、若者たちとの交わりもとても楽しいです。彼らは、通常大人と一緒に礼拝メッセージを聞いていますが、この学びをすることも大切なことなので、礼拝と同時進行で6回の学びをすることになりました。

子供と若者の数が増えるにつれ、新しい奉仕者も必要となりました。興味をお持ちの方は、是非一度、見学にいらして下さい。皆様には、彼らとスタッフのために、引き続きお祈り下さいますようお願い致します。



『帰国者リトリート滋賀』の恵み

陶芸の里：滋賀県甲賀市信楽町



福森真樹
永福南キリスト教会員（東京）

「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」（マタイ19：26）

3月22日から24日まで、滋賀県甲賀市信楽町にある信楽キリスト教会を会場に『帰国者リトリート滋賀』が開催されました。信楽は陶器の里として知られる地です。決して交通の便が良いとはいえないロケーションでありながら、中部・関西圏のみならず北は盛岡から南は四国今治まで各地から90名近くの様々な世代が集められ、一同に会して主をほめ、みことばに養われ、主にある交わりに心くつろぐ、幸いな3日間を過ごしました。



スモールグループミーティング
(順次食事スタート!)

エディンバラで宣教されていた頃、信仰に燃える邦人青年クリスチャンが帰国後に霊的熱意が冷めてしまういくつかの事例をご覧になっていたウィリアムズ富由姫師に「主に近づき霊に燃やされるきっかけとしてのリトリートを」との思いが与えられ、一昨年6月に着任された信楽の教会での開催のために多くの祈りと準備が積み重ねられました。



バックヤードの特設キッチンで大勢の食事支度

信楽キリスト教会は地方の山里（つまり異教的な慣習やシガラミが色濃い地域）にある教会で、普段の礼拝出席者数は20名前後、地域の高齢化も影響して教会メンバーも高齢者が多数を占める小さな教会です。しかしみことばを慕ってよく祈られる素晴らしい

群でもあります。90名規模のリトリートというと、昨今は大ホールと食堂とスモールグループミーティング用スペースが整った宿泊施設で開催されるケースが多いかと思えます。

しかし今回は、この小さな教会の婦人方が大人数の食事準備をされ、全体集会とスモールグループと食事のすべてがパイプ椅子（地域から貸していただいたのだそうです）を並べた会堂で持たれ、宿泊所となったホテルは教会員運転のバスで40分程の距離に・・・という状況での手作り開催の背後にどれほどの献身があるかは言うに及ばず、「主にはおできになる！」との確信をもっ

て開催にチャレンジされた信楽キリスト教会の皆さんの信仰による主への応答に多くの参加者が励まされたことでしょう。

高齢化とメンバー固定化という、日本の大多数の教会がかかえる問題に直面する信楽キリスト教会にとっては、生き生きとして現実的な世界宣教がごく身近にあるという事実を目を開かされる機会となったでしょうし、日本のトラディショナルな教会に違和感や敷居の高さを感じる帰国者にとっては「主にあってひとつ」であることを実体験できる機会となったのではないのでしょうか。

互いが互いの必要を知り、祈る思いを起こされたことは、主の愛と憐れみが日本と世界に行き渡るために、国境や文化圏という境界を超える経験を与えられた帰国クリスチャンが益々用いられるチャンスにつながると期待せずにおれません。



自由時間に陶器製作

リトリート後、早速滋賀県内で月に一度の集まりを持つことが決まりました。また、帰国者フォローアップのために祈り支えるJCFN、ANRC、在欧日本人宣教会から生まれた集会や、帰国者が自発的に教会の枠を超えて持っている主にある集まりも各地で増えつつあります。海外で蒔かれた、或いは、みずみずしい活力を得た信仰をたずさえて日本に帰国する者は多いのです。一人として漏れることなく、日本の地でも実を結ぶ信仰に成長させていただけるよう、そのためにもともに主をほめる良い交わりと、主を深く知るに至る教え励ましが各地で備えられますようにと祈るものです。

福森真樹姉は2011年パリより帰国、現在、大阪市在住。現・放出教会（日本イエスキリスト教団）客員。永福南キリスト教会（東京）会員。

